

# 合鴨君からのメッセージ

第 36 号 2006.12.27

年の瀬も押し迫り、忙しい日々が続いているかと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。今年6月に「合鴨米」2kg袋の新規製作のお知らせをしたのみで、それ以降会報が出せずご迷惑をおかけしました。また、今回は重要なお知らせをしなければならなかったのですが、ご連絡が遅くなりまして、会員の皆様にはご迷惑をおかけしました。また、毎年開催されている総務会の議事内容についても、要約版となってしまいました。議論した詳細な内容については、次回報告いたします。

また、年会費の納入についてもご連絡が遅くなりましたが、同封の用紙でお願いしております。年を越してしまいますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 「全国合鴨米流通協議会」から「日本産直生産者協会」へ

今年6月、「合鴨米」2kg新規製作のお知らせの際に、簡単な通知文の形式で皆様にご連絡いたしました。が、「全国合鴨米流通協議会」は「日本産直生産者協会」に名称が変わりました。

ここで、その経緯を申し上げます。2006年3月18日、熊本県七城町にて総務会が開催されました。出席者は、上田会長夫婦（熊本）、橋口副会長（鹿児島）、原さん（熊本）、澤田さん親子（鹿児島）、岩下さん（熊本）、内野さん（宮崎）、山本さん（熊本）、杉浦子連れ（熊本）でした。上記出席者のもと、総務会で名称変更について検討をしました。また、上田会長のご努力で、今年1月20日に「日本産直生産者協会」という名称が、商標登録となりました。

**【商標登録番号】第4921993号**

**【登録日】** 平成18年(2006)1月20日

**【商標(検索用)】日本産直生産者協会**

**【商品及び役務の区分並びに指定商品又は指定役務】**

30 茶, 穀物の加工品, 米, 食用粉類

31 食用魚介類(生きているものに限る。), 海藻類, 野菜, 果実, あわ, きび, ごま, そば, とうもろこし, ひえ, 麦, 粳米, 飼料, 種子類, 木, 草, 芝, ドライフラワー, 苗, 苗木, 花, 牧草, 盆栽

これまで、「全国合鴨米流通協議会」から「日本産直生産者協会」への移行については、この通信の中でも紹介してきまし、NPO 法人化の検討も進めていることをご連絡していません。しかし、商標に関しては、商標を取得しただけでは文字通り「絵に描いた餅」であり、商標を運用してはじめて、商標の本当の価値が見いだせるものではないかと思ひます。そこで、先の総務会では、総務会の開催日である2006年3月18日をもって、「全国合鴨米流通協議会」から「日本産直生産者協会」へ移行することを決定致しました。現在、新規発注分の「合鴨米」米袋やシールには「日本産直生産者協会」の名称が使用されています。

このことについて、会員の皆様のご意見も伺いたいと思いますので、通信末尾の連絡先までご連絡下さい。宜しくお願い致します。

## ミニ特集（食育編）

ここ2,3年、同封する新聞記事のなかに、西日本新聞の『食卓の向こう側』を入れています。今回は、今年の3月下旬から4月下旬にかけて連載された第8部『食育 その力』を同封しています。食育についてはこれまでも取り上げてきたテーマですが、個人的な話題を交えて、食育についてアレコレ書いてみたいと思います。

なお、『食卓の向こう側』の第1部から第8部までの記事内容は、小冊子としても発売されています（連絡先は同封の新聞記事をご覧ください）。また、インターネットでも部分的に読むことができます（以前は全文掲載でしたが、近頃は「触り」だけ・・・残念。）

### ①橋口さんの「いのちを頂く授業」

今年3月の総務会で、日本産直生産者協会（全国合鴨米流通協議会）の鹿児島県の橋口副会長さんが話された内容を紹介したいと思います。

アイガモ農法の体験学習を行っている鹿児島市立川上小学校では、「アイガモの命をいただく会」を計画しました。無農薬の田んぼで合鴨を放し、雑草や害虫の様子を子どもたちで調べていく取り組みはこれまで何度も開かれているようですが、田んぼから引き上げた後の合鴨は、農家や業者に引き取ってもらうケースが多かったそうです。そこで、合鴨の「最後」も子どもたちみんなで見届けて、しっかり調理して「いのち」を頂くところまで体験する企画を立てたそうです。しかし、川上小学校に限らず、学校の授業でそこまでやるのか、という意見が先生や保護者、PTAから出されていきます。また、クラスの中でも、子どもたち同士で意見が分かれます。何度も話し合いの会を開きますが、なかなか結論が出ません。

同じような話は、昨年のNHK教育でも放映されていました（ETVだったかな?）。こちらの番組では、合鴨ではなく豚が主人公でしたが、クラスの子どもたちみんなで大きく育てた豚（豚には名前がつけられていましたが）を、卒業までにどのように「と殺」しなければならないか、卒業が迫る中、何度も学級会を開いて結論を出していきます。「次の学年に引き渡してもいいのではないか?」「それをすると、彼らが6年生になって卒業を迎える時、また同じ悩みを持つのではないか?」など、議論は深まりながらも「答え」が出せない状況が続いていきます。最終的には、専門業者に委託して引き取ってもらうのですが、それは決して安易な妥協ではなく、クラスみんなで真剣に話し合った結果であったため、最後の別れの日には、涙はあっても悔いのない顔をした子どもたちが、テレビ画面には映し出されていたような気がしています。

橋口さんが長年お付き合いしている川上小学校の子どもたちも、結論に至るまでの過程で、真剣に討論を重ねていきます。また、当日の「命をいただく会」では、子どもたちの急激な成長ぶりをみた親が子どもたちから教えられ、親自身が命をいただくことの意味を考え直し、子どもと一緒に毎日食べるものにも命があることを再認識していきます。詳細は同封の毎日新聞の記事をご覧ください。（関連記事として、西日本新聞の『食卓の向こう側』第13話をご覧ください。）

### ②川島さんの「トリビア」

次に紹介する話も「命をいただく」がテーマです。

千葉で合鴨農法を実践する川島さん（川島さんも日本産直生産者協会（全国合鴨米流通協議会）の会員です）から、近々『トリビアの泉』に出演する、との電話がありました。『トリビアの泉』というのはフジテレビ系列の人気番組で、何曜日だったか？夜9時から始まる、タモリが出演する番組です（今年9月末で番組は終わってしまいましたが）。語弊はあるかもしれませんが、視聴者が投稿した「こだわり」のある、けれども、どうでもいような雑学を、明日の話のタネになるような話題なのか否かを、番組の中の5人の審査員が審査するといった形式で番組は進められます。

そこへ、合鴨の話題が取り上げられました。投稿者からの内容は「田んぼで雑草や害虫を食べてくれる合鴨は、引き上げた後はさばいて食べてしまう」（表現は正確ではありません）といったものでした。当日の審査員にはゲストが何人かいて、その中に元モーニング娘のメンバーだった女性がいて、彼女は「えーっ、かわいそうー」となげいていました。また、別のゲスト審査員として、女性タレント（女優さん？）がいて、そちらは冷静な対応で「私達が食べるお米がそういうかたちで（有機農法で）作られ、そこに合鴨が役に立っているのだから、合鴨の命をありがたく頂くことは大事なことです」（この表現も正確ではありません）といった主旨のようなことを話していました。

その後、司会者から、合鴨が田んぼから引き上げられた後、本当にさばかれてしまうのか否かの「裏」を取るため、番組スタッフが取材したVTRが紹介されます。そのVTRに川島さんが登場します。番組スタッフは約半年かけて、川島さんの合鴨農法の実践風景を撮影していきます。雛が到着し、育雛して田んぼに放飼して、雨の日も風の日も合鴨の世話をする川島さんの奮闘振りが映し出されていきます。大きくなった稲株の間を泳ぐ合鴨は、もはや姿は見えません。そこへ、川島さんが「カモン」と呼びかけると、サーっと川島さんの足元に集まって餌を食べに来る、といった映像も紹介されます。次第に、川島さんと合鴨の間には親密な関係が育っていくのが、テレビ画面を通して醸し出されていきます。そして、とうとう合鴨を田んぼから引き上げる日がやってきます。川島さんは、むんずと2羽の合鴨の首根っこをつかみ、そのまま歩いて家に持ち帰ってしまい、玄関の中へと川島さんと合鴨が消えていくシーンで取材は終わってしまいます。番組の中では、合鴨をさばくシーンは出てきませんが、玄関の中で合鴨がさばかれてしまうんだ、という想像を視聴者が持つような仕上がりになっています。

この番組の私個人の感想は、川島さんの優しい人柄がとても出ていて、合鴨との仲睦まじい様子が終始ほのぼのと紹介されており、時にはおかしくすらあったので、何ら合鴨農法が誤解されることはない、というものでした。残酷な印象は全くなく、むしろ合鴨農法の一面をよく捉えた取材内容となっており、かつ、川島さんの農業のプロとしての気骨さ、合鴨への愛情の深さが視聴者にも伝わったのではないかと、思っています。取材を受けられた川島さん、大変お疲れ様でした。取材を受けてから放映されるまで、いろいろご苦労・気苦労があったかと思いますが、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

以上、2つの話を紹介させていただきましたが、どちらも「いのちをいただく」こととどう向き合うか、子どもたちや家族でどのように話し合っていくか、を考えさせる内容だったのではないかと思います。西日本新聞の記事にも関連記事がありますので、是非、目を通していただければと思います。

## 編集後記

編集がいない薄い内容で恐縮です。これで年を越せればなどと考えておりますが、ご

意見・ご質問がございましたら、通信担当までご連絡下さい。個人的には、今春、果樹試験場に異動となり、またもやドタバタの毎日が始まって、あっという間の2006年でした。来年のことを言うと鬼が笑うそうですが、来年はもう一人子供が産まれる予定です。いつまで続く貧乏暇なし生活、けれど人は一人では生きていけない、常に誰かに助けられ生かされていることに感謝して、来年も頑張っていきたいと思います。

最近、仕事柄、47年間ネーブルを作っていたらっしゃる老農家のところに行く機会が多いのですが、数年前にその方から「厳しさの中にも楽しみのある農業を」と言われました。その言葉の重みを大事にして、今もお付き合いをさせていただいております。どれだけ、そうした生産農家のお手伝いができるか、微力を尽くす日が続く、と思うこの頃です。

ここで、またもやお詫びですが、昨年、アンケート調査を実施し、数人の方から回答を頂きました。この場を借りて、お礼申し上げます。アンケート集計結果については、回答者にはもちろんのこと、会員の皆様にもお返ししたいのですが、こちら、次号で予定をさせていただきます。申し訳ございませんでした。